で答えようがありませんが、しいて言えば、時間と金銭の浪費かな。でもプラスの面との損得勘定で考えれば、良いことしか頭に浮かびません。こういう表現と考え方は嫌いですが・・・」

Q「巡礼中に今でも印象に残っていることがあれば、お聞かせください。」

A「そうですね、今思い浮かぶことと言えば、巡礼中に出会った人々のことですね。一体彼らは今何をしているのか？彼らの姿が即座に思い浮かびます。その中でも、フランス人のベネディクタのことですね。ビア・フランカという中世の面影を残した、美しい山中の街があります。そこからエル・セブレイロまでは、二つの道があり、一つは国道、もう一つは、山の稜線を辿る道です。せっかちなスペイン人たちは国道を歩いていったようですが、僕は排気ガスを吸う道より、少々遠くても、車のない道を選びました。どんどん山を登っていきます。途中道なき道の如く、熊笹の生い茂った山道を歩くこと二時間。やっと前を歩く巡礼者が見えた時に、自分の歩いている道が正しいのだという、確証をその時得、安心しました。タバコを吸って休息している彼女に追いつき、そこから彼女との会話が始まりました。フランス人にしては長身。髪の毛は栗色で、長くも短くもなく、パーマをあてている。誤解されては困るので、私好みの女性ではないことはちゃんと理解して欲しい。とは言っても、彼女の持つ雰囲気や知性には牽かれたが・・・・。端的に表現すれば、「小津安次郎の映画が好きなフランス人」。というのは、スペイン人というのは、これは悪口ではなくて、単純すぎて面白くない、それに対して、フランス人はちょっと斜めに構えて、顔はスペイン人ほど、かわいくはないのですが、大人の魅力というか、知性的、哲学的なんです。僕はフランス語はまったく忘れていましたので、彼女とは英語で喋ったのですが、単刀直入に巡礼の動機を聞いたところ、長年連れ添った夫と離婚。夫はアメリカ人でカリフォルニアに住んでいたらしい。息子は二人ともアメリカの大学の大学生。経済的には子どもの学資保険みたいなものをかけていたので、彼らの費用に関する問題はないとのこと。成人しているので、二人の息子もアメリカとフランスの二重国籍でパスポートを二つ持っている。巡礼を終えたら、フランスのパリで仕事を探すとのこと。まさに、人生の転換点で自分を見つめ直すための巡礼。それから四日後のことである。それまでも何回か顔を合わせていたのだが、話す機会もなかった。二十人収容の小さなベルギウム。一部屋に十個のベッド。そこへ僕がたどり着いたのが遅かったので、下のベッドは既に占領されていた。オランダ人夫婦、カナダ人とドイツ娘の若いペアー、フランス人の男と女の二人づれの計六人が既にいた。当然下のベッドに空席は無い。もう一つ部屋があるが、鍵がかかっている。結局顔見知りで、しかも二日ほど前同室だった、初老のオランダ人の上のベッドにすることにした。今日はもう巡礼者は来ないだろうと思っていたら、ベネディクタが最後にやって来た。管理者である、カルメンがもう一つの部屋の鍵を開けたので、これは「ラッキー」と思い、部屋をすぐさま変わる。近くにレストランが無いので（当り前だが、家は数軒の田舎の村）、オランダ人夫婦はちゃんと食料持参でベルギウムの台所で夕食。後はカルメンが造ってくれた、サラダ、スペイン風オムレツ、パンとワインの食事を残りの六人で食べる。いよいよ寝るだんになって、今まで男女混合で、縦横になったり、上下になったり、巡礼者の宿泊所はそんなものなのだが、何となく落ち着かない。二人きりで、もちろん隣の部屋には宿泊客がいるのだが、少々緊張してしまう。彼女が占領していた場所とは一番遠いベッドに陣取ったのだが、フランス人というのは、鈍感なのか、大らかなのか、良く分からないが、堂々と着替えをし始める。寝っころがると、角度的に彼女のベッドが見える位置に僕のベッドはあったわけで、偶然寝る前の着替えで彼女の上半身の後姿を見てしまった。背中に思わず色気を感じてしまった。彼女が男として僕を意識していたとは思わないが、こっちは何か複雑な気持ちになってしまった。電気を消すけど良いかと聞かれ、その後、彼女に「ドアを開けたままがいいか、ドアを閉めたほうが良いか」聞かれ、「このベルギアムは毛布が無かったので、締めていただいたほうが、寒がりがりや、の僕にとっては望ましかったのだが、そこは、紳士ずらをして、「開けたままで」と答えてしまった。その後、「お休みなさい」という、彼女の言葉を聞いた